現代敬語辞典

奥山益朗編

現代敬語辞典

奥山益朗編

東京堂出版

編者略歴

大正七年東京に生まれる。昭和一六年東京大学文学部社会学科卒。朝日新聞東京本社で「文芸朝日」「週刊朝日」各副編集長、出版校閲部長、出版局次長を経て現在朝日新聞社社友。日本ペンクラブ理事。

著書に『日本語は乱れているか』『あいさつ語辞典』『原稿作法』『文章作法』『味覚辞典』『日本人と敬語』『話し合いと対話』『出版文化』(いずれも東京堂出版)がある。

現代敬語辞典　定価 二三〇〇円

昭和四八年六月二〇日　初版発行
昭和五五年一月二〇日　五版発行

編者　奥山益朗
発行者　岩出貞夫
印刷所　三松堂印刷株式会社
製本所　渡辺製本株式会社

発行所　株式会社 東京堂出版
東京都千代田区神田錦町三ノ七 〒一〇一
電話東京二三三局三七四一　振替東京 二七〇

1581-148139-5164　©1973 Masurō Okuyama

序　文

日本語をテーマにした本が、つぎつぎに出版されている。しかし、果たしてよろこんでいいことなのかどうか、多分に疑問がある。なぜならば、日本語についての論議というのは、絶えず堂堂めぐりであって、ほとんど結論らしい結論が出せないからである。

敬語もその一つであって、日本語に独特な語法であることは従来しばしばいわれているが、敬語をどう見るか、つまりその価値判断となると全く百人百様である。敬語をいかに分類してみたところで、またなにがしかの文法を作ってみたところで、例外ばかりふえてしまって、ほとんど物の用に立たないようだ。

昨秋の「日本文化研究国際会議」に出席のため来日した台湾大学の黄得時教授としばらく日本語論議をした。黄教授はもとの台北帝大の卒業生だから日本語はペラペラである。黄教授がいうのには、たとえば店に入ってある希望の品を注文したとする。残念ながらその品がないとき、店員は「ただいま切らしております」という。この「切らして」が、どうしても納得できないというのである。黄教授の受ける感じでは、「切らしている」という表現は、「切らしめている」つま

り、意地悪く売らないという意味の言葉に受け取れるというのである。

これに対して私は、「いや、切らされている」という被害の受け身であって、在庫のないことを婉曲に表現しているのだと主張する。しかし、この主張は黄教授にはあまりよく通じないようであった。彼のように教育も、また語感も、日本人とほとんど変わらないように見える人にとってさえ、日本語の微妙な表現にはついていけない点があるようである。

これはほんの一例だが、敬語について議論し合えば、際限のない話題がころがっている。酒の肴にはもってこいの話題だが、これを何とかまとめようと試みると、とうてい収拾がつかない。私などのように国語を専攻していない者は、「申す」というのは「言う」の謙譲語とばかり思い込んでいたところが、平安時代に「言う」の丁寧語の場合があるのを知って、少々あわてたりするのである。そうなると、「先生が申されています」という表現が必ずしも誤りではないことになるのだが、私にとっては何とも奇妙な敬語としか受け取れない。

それはちょうど黄教授が「切らしています」に違和感を感じるのと全く同じで、一つには「られる」敬語に縁遠い東京っ子の私にとっては、わかるけれども変テコな言葉なのである。つまり言葉というのは、元来耳からおぼえたものであって、厳密にいえば自分の言葉などというのは一つもない。すべて戴き物を使っているわけで、何を戴くかは結局生まれ育った環境によって、人さまざまということになる。

少々余談だが、西洋人は人に物を贈るときに、決して「つまらないものですが」などとはいわ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

ないと聞いてきた。これをもって、日本人の謙譲の美徳と思ってみたり、不必要な遠慮と考えたりもした。ところが最近ある外国通の先輩にきいた話では、たしかにアメリカ人は自己顕示欲が強いので、決して「つまらないものですが」などとはいわないが、ヨーロッパ人、ことにドイツ人はだいぶ日本流に近いのだそうだ。もしそれが本当なら、「西洋人は……」という前提が、そもそも間違っていることになる。近ごろ流行の「日本人論」も、多分にこれ式の間違いが多いのではあるまいか。

たしかに敬語は日本語の一大特徴だろうし、そこには日本人ならではの思考様式が大いに幅を利かしているようである。この点については、拙著『日本人と敬語』（東京堂出版）の主テーマとして、一応拾い上げておいた。しかし、敬語の基本となっている尊敬とか謙譲とか丁寧とかいう心情が、一体どの程度に日本的であり、どの程度に世界的なのかについては、外国の知識にうとい私には皆目見当がつかない。同じ人間同士なんだから、あまり違いがないのではないか、という大ざっぱな感じも抱いているのである。

言葉はいうまでもなく意味の記号である。「いらっしゃる」という記号と、「おられる」という記号がもし等価なものなら、どちらを使ってもいいという結論になる。敬語はとにかく価値判断を伴うものだから、何とかしてこの等価の部分を多くすることはできないものだろうか。語彙の一つ一つを取り上げて論ずるよりも、価値の面からなるべく似た言葉をイコールにしてしまうことが必要なように思われる。

敬語という大海原に漕ぎ出してはみたものの、波は高く貧相な小舟は潮に流され、まさに難破寸前の思いであった。この本もまた、東京堂出版の古河功、斎藤紀夫氏ら、校閲をしてくださった大貫須美子さん、そして印刷、製本の方がたのご尽力によってできたもので、心から感謝している。

昭和四十八年六月

奥山益朗

凡例

一　見出し項目は、主として現代（明治・大正・昭和）使われている敬語をかなで示し、つぎに【　】で括ってその漢字まじり語を付けた。

二　見出し項目の敬語は、文法上の敬語に限らず、敬語表現に使用される語も加えた。配列は現代表記による五十音順とした。

三　見出し項目のつぎに解説、現代用法、他の等価敬語（類義語）を書いた。これら関連項目の参照には、→印でその項目を示してある。

四　○印以下の文章は見出し項目の用例である。

五　引例のうち◆印は現代文学、新聞・雑誌からのもの、◇印は書簡文である。引例は原文どおりであるが、改行の分を追い込んだ場合もある。

六　引例についで〈参考〉として、古典から引例した。これはその項目の語の発生になるべく近い時期の用法を採用してある。

概

説

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

I　敬語に見る現代的背景

それは昨秋九月下旬のことであった。田中首相が訪中、日中の友好関係を再開した。その初日、九月二十五日の晩餐会で、田中首相と周恩来首相がそれぞれ挨拶をした。こういう場合の挨拶というのは、いわば型どおりのものだろうが、敬語の観点から見ると、時代離れのした言葉の出現にはちょっと驚かされたのである。

田中首相は「周恩来総理閣下ならびにご列席の各位。このたび周恩来総理のご招待を受け日本国の総理大臣として隣邦中国の土を踏むことができたことは私の喜びとするところである。……」というのである。これは本文の「かっか（閣下）」の項の例文に借用させてもらった。

一方、周恩来首相のほうも「尊敬する田中内閣総理大臣閣下、日本の貴賓の皆さん、友人、同志の皆さん。日本首相田中角栄閣下が中日国交正常化問題の交渉と解決のため、招きにこたえてわが国を訪問されたことをわれわれはうれしく思う。……」となっている。もちろんこの文章は、中国語を日本語訳したものだが、「閣下」という言葉が久し振りに登場したのには、何か亡霊が現われ出て来た感じがしたものであった。

まして「田中角栄閣下」となると、思わず吹き出してしまうような敬語である。恐らく中国語でも「閣下」というのだろうが、われわれが感じるほどにはおかしくないのだろうか。身分差を表現する「貴賓」にも、ちょっとひっかかる。もっとも「同志」という、あちらでは新しい言葉も同席している。その点、どのような語感を伴っているのか、中国人に聞いてみたいものである。

「閣下」という敬語が日本語から消えたのは、終戦後のことである。それまでは、文官は勅任官以上、武官は将官以上が「閣下」であった。戦争に敗けても、「元閣下」は旧部下達に「閣下、閣下」と呼ばれて、くすぐったいがいい気持ちになっていたものである。戦後も二十八年も経つと、さすがに「閣下」は聞かれなくなったが、そこに「田中角栄閣下」が現われたのだから、何とも格好がつかないのである。

日本語の敬語は、皇室用語がその中心といってもよかった。たとえば七世紀初めのものとされている法隆寺金堂薬師仏の光背銘は、「池辺大宮治天下天皇大御身労賜時歳次丙午年召於大王天皇与太子而誓願賜我大御病太平欲坐故将造寺薬師像作仕奉詔……」となっている。古事記が作られたのが八世紀の初めだから、それより百年ほど古い。

この一見漢文体の文章も、決して純粋な漢文ではない。吉沢義則著『国語史概説』によると、この文章は「池の辺の大宮に天の下治しめしし天皇、大御身労はり賜へりし時、歳次丙午の年大王天皇と太子とを召して、誓ひ願ひ賜ひしく、我

が大御病太平に坐さむと欲ほすが故に、寺を造り、薬師の像作り仕へ奉らむと詔りたまひき」と読むのだそうである。

つまり日本人は漢字を貰ってきてから三世紀ほどの間に、これを見事に自分のものにしてしまい、日本語を書き表わすのに便利なように作り直した。「大御身労賜時」とか「誓願賜」とか「作仕奉詔」とかは、漢文ではない。一見漢文ふう日本文である。そして、そのなかにたくさんの敬語をはめ込んだのである。この文章も天皇に関する事柄なので、「大御身」とか「労はり賜へりし時」とか「詔りたまひき」とかを、文中に入れないわけにはいかない気持ちになっていたのであろう。

大正天皇が崩御になり、昭和と改元された日の新聞の一部分を引用しよう。大正天皇のご遺体の安置されてある葉山御用邸の一間の模様である。

「拝すれば聖上には御枕やゝ高く純白の羽二重御褥の上に静に御臥床になり神々しい竜顔にいさゝかの御苦痛も拝されなかったと承る、御病床右側には畏くも薨たけた玉顔に御憂ひををびさせられた皇后宮を始め奉り東宮、同妃、高松宮、澄宮各殿下の御順に、左側には刻々に細り行く御脈を拝してゐた入沢侍医頭につゞいて徳川侍従長、大森皇后宮大夫、侍医が畏み侍してゐる、……」（朝日新聞・1・12・25付）

このうち、「聖上」「竜顔」などは天皇にしか使えない尊敬語であり、「拝す」「奉る」「畏くも」などは、それにふさわしい謙譲語であった。これらの敬語がすっかり姿を消したのは、やはり終戦後のことである。

敬語について論議をする際、終戦後の国語改革を素通りすることはできない。国語改革というと、当用漢字や現代かなづかいが中心となっているのは事実だが、一方では日本語そのものを大きく揺るがせてしまったのである。敬語もまたその被害者の一人だったともいえよう。

敬語を崩したのは何か

昨年（昭和四十七年）十一月、日本ペンクラブの主催で「日本文化研究国際会議」が京都で開かれた。二十一日、日本語分科会のパネル・ディスカッションで三笠宮殿下がつぎのような発言をされた。実はその前日、全体会議に際して芹沢会長の開会の辞に続いて、三笠宮殿下が挨拶をされた。プログラムにはそれが「お言葉……三笠宮崇仁殿下」と印刷されていたのである。

「きのうの私の話をプログラムには『お言葉』と書いてある。元来、こんな用語はなかったもので、これは戦後の発明だろう。『お言葉をいただく』とか『お言葉を賜わる』といういい方はあったが、独立した『お言葉』はなかった。天皇や皇族に対する敬語は、いまも根強く残っているが、その姿は変わりつつある」

というような趣旨だった。三笠宮殿下は敬語の受け手にな

られる場合が多いので、殊に関心がお強いように見受けられた。いまわれわれは「竜顔」「玉顔」とはいわず、ただ「お顔」という。「行幸」はなくなり「おいでになる」となり、「臨御」は「ご臨席」に、「還幸」は「お帰り」となってしまった。

天皇がお亡くなりになった場合でも、「崩御」という言葉は使わないはずである。将来の新聞の記事をどのように書くか、見ものである。

私は特別に天皇制度に深い関心を持っているわけではないが、かといって廃止論者でもない。日本国憲法では「象徴」という奇妙な翻訳調で済ませているが、「象徴」であろうと「元首」であろうと、天皇制度を残す以上は、それにふさわしい敬語が残ってもよかったのではないかと思っている。

それというのも、日本語の敬語の基本は人称と密接につながっている。石坂正蔵氏は、ヨーロッパ語の人称の概念とは別に、日本語には敬語的人称、つまり敬語的自称や敬語的他称を設ける意見であるが、これはまことにもっともなことで、この辞典を編集する際にも、その点でいろいろ考えあぐむあった。

日常、自分のことを「僕」といっている。ほとんどのれで通用する便利な言葉である。殊に私のような五十なると、世間一般での話し相手はほとんど私と同位か人たちである。その点「僕」は難なく通用する。しか私より地位の高い人、高齢の人の前へ出たなら、「僕」は使えない。多分「わたくし」にするだろう。つまり私にとっては、「僕」は謙譲度ゼロの自称だが、「わたくし」は謙譲度の高い自称となる。しかし「わたくし」がだれにとっても謙譲度が高いとは限っていない。天皇陛下は「朕」という言葉を失われ、「わたくし」とおっしゃるが、この「わたくし」は謙譲度はゼロに近かろう。私が使う「僕」と同程度かもしれない。

対称の場合も同様である。私は家内に対して「お前」とはいわない。これは決して民主主義を遵奉しているのではなく、私のボキャブラリーのなかに、「お前」がないのである。私は東京の山の手育ちのせいか、下町の人たちが使う「お前」に何となく嫌悪を感じていた。よく友人同士で「お前」を使っているのを聞くことがあるが、私は一度も使ったことがない。男の友人なら「きみ」だし、女なら「あなた」になる。従って家内に対しても、「あなた」である。つまり、私にとっての「あなた」は尊敬度がほとんどゼロの対称なのである。

そこで、目上の人に対しては「あなた」は使えない。文部省の『これからの敬語』では、「あなた」を使えということだが、私にとっては文部大臣に向かって「あなた」と呼び掛けることは大変失礼に感じるのである。このことに関して高島敦子さんは「『あなた』と呼ばせて」という小論を書いている。

高島さんは『言語生活』(47・10号)の「耳」欄に、三歳の

お嬢ちゃんが病院でお医者さんに向かって、「この前、あなたのところへ来たのはいつだったでしょう」とたずねたことについて論議されているのを引用し、つぎのように書いている。

実は私自身、常日頃から、対話の相手を、年齢や身分に関係なく『あなた』と呼べたらどんなによいだろうと思っていた。今までの日本人の言語習慣では、相手を『あなた』と呼べる場合はおよそ次の三つに限られるのではないだろうか。第一に相手が自分より年下または目下の場合。第二に相手が自分と同年の場合。第三に相手が自分より若干（五つぐらいまで）年上であるけれども、身分的には等しい場合（たとえば、同僚とか下級生と上級生の関係）。この三つ以外の場合には、名前を呼びすてにしたり『さん』や『ちゃん』をつけて呼んだり、血縁関係を表わす名称で呼んだり、職業名で呼んだりしている。ところが現実には、右にあげたいずれの場合にもあてはまらない人間関係があるのだ。（言語生活・47・12号）

「あなた」ひとつ取ってもこの有様である。かつてグローター ス神父は、日本語をI wordsとYou words、つまり自分側が使う言葉と他人に対して使う言葉に分けてしまえということを主唱していたが、まことに卓説であった。人称と敬語との結び付きは、敬語の基本に密着することだと思う。

ありがとうのない社会

敬語の崩れは、まず人称の崩れといってもいい。かつては「おかあさん」「おかあさま」「かあさん」「かあさま」「おっかあ」などなど、母親を呼ぶのに二十くらいの敬語があった。それらのうち、どれを選ぶかは本人の属している社会的環境が決定してくれた。「おかあさま」と呼びかければ、文末は「なさる」とか「遊ばす」が対応する。「かあさん」だったらどう、「おっかあ」だったらどうと、みな対応関係ができ上がっていた。「おっかあ、飴買ってお呉れよ」だって、立派な敬語である。

それが近年、母親を呼ぶのに「ママ」となってしまってからは、あとに続く敬語はむずかしい。こんなところに、敬語と人称との関係がチグハグになってきてしまった原因があると思われる。

日本語に他称が少ないのは周知のことだが、これもまた敬語との結び付きで、考えなければならない問題である。たとえば辻村敏樹著『敬語の史的研究』（東京堂出版）の巻末に、各種人称の時代別一覧表が付いているが、上代から現代までを含めて、自称は五十一、対称は八十一なのに比べ、他称は二十七しかない。実際にわれわれが会話を交わしていて、第三者を人称代名詞で表わすのは相当に困難である。友人同士なら「あいつ」でも「彼」でも済むが、少しかしこまったら、

もうお手あげである。田中首相と話をしている時に、大平外相のことを指して、私は「彼」とはいえない。せいぜい「あの方」だろうか。英語であったなら、何のこだわりもなくいえる he が、日本語にはない、いや、あるにはあるが使いにくいのである。

田中首相は私と同年齢である。従って、田中氏が一年生議員程度の時なら、私と「君、僕」で話してもおかしくなかったはずである。しかし現在、首相となった田中氏を私は「君」とは呼べない。一方大平外相は田中首相より、年齢も、政治家としての経験も上である。内閣のなかでは田中氏のほうが上だが、政治家としても、また一個人としても、大平氏のほうが上である。そこで、私は田中首相に対して、大平外相を「彼」という他称では呼ぶことができない。田中首相の秘書を指すなら、私は「彼」といってもいいのである。

日本語の敬語は相手と自分の、相対関係で成り立ち、第三者の他称でさえもが、その相対関係を考慮しなければならない。これはまるでパズルを解くような難事である。そこでなるべく他称は使わない、というのがこれまでの習慣となっていたのである。

このことは単に敬語に関してだけではなく、日本社会の基本にかかわる重大なことである。第三者、つまり自分と自分にかかわりのある人以外の人びとは、有象無象であって、まことに縁なき衆生である。まあ幸いに日本は極東の島国にちんまりと暮らしていたので、縁なき衆生に警戒する必要はあまりなかった。ヨーロッパのように小さな国ぐにが国境を接してひしめき合い、いつ何時相手から攻め込まれるか、いっしょに暮らしている隣人が異人種で、宗教も違えば母国語も違うといった心配は、この瑞穂の国にはなかった。そのために、第三者とともども社会を作り、約束を守るといった習慣も努力も不必要だった。

西洋人はちょっと体が触れたりすると「エキスキューズ・ミー」などという。これが礼儀正しいことの見本のようにいわれ、またそれは結構なことでもあるのだが、裏を返せばそうでも弁解しておかないと、とんでもないことになりかねない敵と同席している警戒心から起こったことかもしれないのである。昨秋、軽井沢の家からごく近い小浅間へ、浅間ブドウを摘みにいった。こちらは散歩姿の軽装だが、すれ違う若人たちは浅間登山の帰りとみえて、大きなリュックを背負い、まるでアルプス登山のような格好である。彼らは私とすれ違うたびに、「こんちは」という。やむなくこちらも「こんちは」と答えるのだが、何ともおかしなことだった。

登山家は山ですれ違う際に「こんちは」という。その位は私でも知っている。しかしそれは山らしい山で使うべき言葉であって、目と鼻の先にコカコーラの看板のあるところでは、むしろお笑いである。意地の悪い私などからすれば、彼らは山では「こんちは」というエチケットを知っていますよ

という見栄のように感じたのであった。そういうのに限って、いざ汽車に乗る時にはわれ先に飛び込み、大きなリュックで二つも三つも席を先取りするに違いない。相成るべくは、山男たちは銀座通りを「こんちは、こんちは」といって歩いて貰いたいものである。

さらに付け加えるなら、電車やバスのなかでは長い足を組まず、電車の扉のところには立たず、ちょっとした好意に対しても「ありがとう」といったらどんなものだろうか。

II　敬語が果たしている役割

また話が最初に戻るが、田中首相は昨秋の訪中の挨拶のなかで、「日本国の総理大臣として隣邦中国の土を踏むことができたことは私の喜びとするところである」といっている。これに対して、周恩来首相も、「私は毛主席と中国政府を代表して田中首相および貴賓に熱烈な歓迎の意を表する」といっている。大切なのは、この「……として」である。

もちろん、こういう挨拶は外交文書として双方の記録にとどめられる文章であり、練りに練ってあるものだろう。ついでに余談としていうと、周首相は挨拶のなかで、「私は双方が努力し、十分に話し合い、小異を残し大同を求めることにより中日国交回復は必ず実現できるものと確信している」といっている。日本では「小異を捨てて大同に付く」とはいうが、「小異を残す」とはさすがにうまいことをいったものである。

さて、こういう公式発言であるから、「……として」ははっきりとしている。この「……として」がなければ、お互いに「閣下」「閣下」とは呼び合えないはずである。つまり、「閣下」という尊敬語は、互いに立場を確認した上で成り立つ。「……として」というのは、この立場の表明である。

もちろん、われわれは日常の会話で、いちいち「……として」とはいわない。そんなことをいわなくても、お互いの立場は暗黙の了解が付いているからである。だから初対面のときはお互いに名乗り合うし、名刺を交換してお互いの立場を確認し合う。

だから困るのは電話である。「はい、奥山でございます」といった途端、相手が中学校時代の親友だと分かったら、「何だ君か。その後元気かい」に変わる。そんなことは日常よく起こることで、立場が決定して初めて敬語が決定することを、電話はよく物語ってくれる。

ところがまた、この逆の作用もある。初対面の人はもとより、利害関係の複雑な場合、上下関係が微妙なときには、敬語の使い方によって互いの立場を設定するという方法もある。サラリーマンによくあることだが、同僚や後輩が自分より上の地位になったときの敬語はむずかしい。公式には敬語を使い、私的には無敬語を使うというのが一応の決まりだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook